

THE S.P ECO NEWS

☆☆夏号☆☆

「今日から貴方も ECOしちゃおう？」

今回のECO情報

「石油の起源は？」

石油高騰の記事が毎日のように新聞の一面を賑わしています。私達の生活に不可欠なガソリンや灯油のみならず、プラスチックや合成繊維なども、この石油から作られているのは誰もが知っていることでしょう。

では、その石油の起源とは何でしょうか。

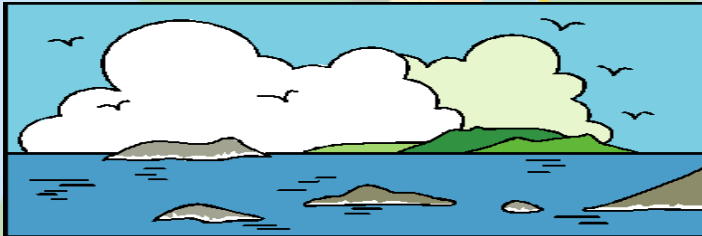
石油は別名を化石燃料と言います。その名の通り太古に死滅した微生物の屍骸が積み、その上を堆積層が積み重なることで、高温と高圧の影響を受けて、液体やガスの炭化水素に変化したものが石油になると考えられています。これは生物由来説(有機成因論)と呼ばれるもので、一般的に広く受け入れられている学説です。

しかし、研究者の中には主流となっている生物由来説を否定する学者もいます。それが無機成因説です。この説は、地球の内部に存在する多量の炭化水素が地表へと染み出し、多孔質岩の地層に蓄えられたものとの考えです。生物由来では説明の余地がない深い油田の存在や、枯渇油田がしばらくすると再び原油の産出が可能となる事実が無機成因説の根拠となっています。

これらの説は多くの点で科学的な矛盾を抱えており、論争には決着がつかないのが実情の様です。

どちらの説を信じるかはともかくとして、私たちの生活に欠かせない石油の可採年数は、2006年の時点で40年から65年と言われています。その一方で、オイルシェールやオイルサンドといった石油を含む地質や岩石から採取することができれば、130年間は産出が可能とする学者もいます。既にこれらから採取する技術は確立されており、あとはコストの問題だけのことです。

いずれにしても、今までが安すぎた石油を高くなったと慌てることなく、限りある資源と考えて、無駄なく大事に使うことが我々にとって必要なことではないでしょうか。



森林認証用紙使用

梅雨明けも間近である。東京が太平洋高気圧に覆われると、セミたちの協演が始まる。二重奏道では、アブラゼミやミンミンゼミ、ヒグラシにツクツクボウシの鳴き声が聴かれる。これらは東京では一般的な種類だ。しかし最近では、南日本に棲息するクマゼミの声も耳にすることがある。以前には全く見られなかったセミだ。これも温暖化の影響であろうか。

環境省では、今後の温暖化による影響として、ネットタイシマカやハマダラカといった熱帯の蚊が北上すると予測している。これらはマリアアや Dengue 熱などを媒介する蚊で、東南アジアでは、多くの人々が死亡する厄介な風土病だ。既に外来種の毒蜘蛛であるセアカゴケグモは関西で定着してしまっただけで、このニュースを見ると温暖化は否定できない事実と感ずる。

これら小さな昆虫たちが発する人間への警告を、夏の風物詩としてはならない。

ISO14001維持審査を終えて

6月19日と20日の2日間にISO14001の維持審査が実施されました。認証取得から3年を経過した昨年に更新されて、初めての維持審査となりました。今期の環境委員は2年目を迎え、昨年の更新審査のような焦燥もなく、実に落ち着いた対応で審査を受けていました。

初日のトップインタビューで社長は、我々社員に望む課題として、4事業本部が環境面で競合して改善させることが重要と言われました。その好例が毎年開催されるジャガイモコンペです。今年は第6回目を迎えました。収穫量のみならず生産技術の向上も評価を頂いております。このように環境面でも切磋琢磨し、CO2を少しでも減らす方向に進めるように指示がありました。

今後の課題として話されたことは、オーガニックは不味いというイメージを払拭したいということでした。また、ケミカルな食材を堆肥にしても効果は疑問だが、当社の食材はオーガニックの比率のみならず、天然の素材も取り入れているので、他社には負ける要素がない。その残飯も廃棄物という考えを捨て、よりオーガニックの比率を高めた堆肥から野菜を栽培したいとも話されました。野菜の栄養素についても50年前の物の10分の1程度しかないとの資料を提示され、エコファーム産野菜の栄養素値についても拘って生産したいと述べられております。

審査員より今回の審査での希望は、との問いに対して、環境活動は人間が行なうものなので人間を見て欲しい、そして美化が徹底されているかも審査の対象してもらいたいと言われておりました。更には審査員に対して望むこととして、環境問題は人間そのものなので、今後は他社の社長をインタビューする際は体重を訊いて、メタボリックであったのであれば認証を取り消してはどうか、との提案がありました。確かに、自分を律することができない者が、環境をコントロールすることは難しいでしょう。この提案には審査員も爆笑すると同時に、大いに共感しておりました。

最後に我々が行っている環境活動に対しては、常に楽しく前向きに実施し、結果や成果を喜び合って、それを糧として更に発展させて欲しいとの指示がありました。

我々はややもすると審査のための環境活動になりがちですが、社長の環境に対する思い入れや理念を理解し、より積極的に行動しましょう。社長が言われるように、環境とは人間そのものです。一人ひとりの意識と実践により、良い職場は作られ、更には良い地球環境になるということを認識し、日々の業務と環境活動を一体化させましょう。



コラム 「温暖化と昆虫」

梅雨明けも間近である。東京が太平洋高気圧に覆われると、セミたちの協演が始まる。二重奏道では、アブラゼミやミンミンゼミ、ヒグラシにツクツクボウシの鳴き声が聴かれる。これらは東京では一般的な種類だ。しかし最近では、南日本に棲息するクマゼミの声も耳にすることがある。以前には全く見られなかったセミだ。これも温暖化の影響であろうか。